

音楽学から見た分析美学の「表出」論争

田邊健太郎 (Kentaro Tanabe)

立命館大学

分析美学における音楽の表出論争では、なぜ我々が感情に関する用語——「悲しい」、「楽しい」、「嬉しい」など——で音楽を記述するのか、という問題が問われている。その問いに対して、音楽は人間による感情表出と類似しているからそのように我々は記述するのだ、と答えるのが「類似説」であり、音楽を聞くときにそうした感情を表出しているペルソナを想像するからだ、と考えるのが「ペルソナ説」である。その他、複数の立場が提起されているのは、源河発表が示すとおりである。表出論争では、通常次のように制限がかけられる。まず、標題やテキストを伴った音楽は考察対象として除外する。次に、感情が個人的記憶や社会的慣習と結びつく場合も除外する。

本発表の目的は、特定の説を支持することではなく、通常問われることの少ない観点から論争を整理することによって、論争をより広い文脈に位置づけることである。そのために、分析美学以外の音楽研究や、分析美学で言及されるものの正面から取り上げられることの少ないロジャー・スクルトン (Scruton, Roger) などの議論を活用する。具体的には、以下のような論点を提示したいと考えている。

第一に、感情用語による音楽記述の意義という観点から論争を考える。表出論争はもっぱら「なぜ聞き手は感情用語で音楽を記述するのか」という問いに取り組んでいる。だが、なぜ感情用語による音楽記述に着目するのだろうか。音楽美学の歴史の中では、「音楽は音によって動かされた形式である」とする形式主義や、「音楽は言語で表現できないものを表出する」といったロマン主義的音楽観が存在している。加えて、音楽への反応は、体を動かしたり、聞いた節を口ずさむなど、言語記述に限定されるものではない。「音楽を感情用語で記述する」ということは、音楽理解にとってどれほど重要であるのだろうか。また、重要であるならば、なぜ重要なのだろうか。こうした観点から論争を検討することで、表出論争をより広い文脈に位置づけたい。

第二に、「構造的／局所的」、「作品／楽譜／演奏」という区分を導入する。

まず、表出性を楽曲のどこに位置づけているのか、という観点から論争を整理する。例えば、類似説では局所的な和声進行や音程の上下などが人間の表出的振る舞い等と類似すると主張する。対して、ペルソナ説では、聞き手は楽曲全体を物語的構造と捉え、その中でペルソナが展開されることを想像することになる。こうした表出性を帰属させる範囲の違いに着目して論争を整理しながら、音楽学の研究との接点を見出したい。

次に、「作品／楽譜／演奏」という区別を論争に適用する。表出論争においては、多くの論者は楽譜から読み取ることができる情報と対応付けて表出的性質を説明する。だが、多くの音楽愛好者は楽譜を読んで表出を理解するのではなく、何らかの仕方で楽曲を聞いてそれを把握しているだろう。演奏には楽譜に還元されない音響的要素があり、ライブの場合は演奏に関する視覚的要素も存在する。加えて、演奏者の解釈に

よって、曲から受ける印象が大きく異なるという事例もある。こうした論点に関わる音楽心理学や演奏研究の成果を紹介しながら、それが表出論争へもたらす帰結を考える。また、可能であれば、表出論争の制限（例えば、個人的記憶や社会的慣習に結びつく感情の排除）と関連する研究も取り上げたい。